

『修習次第初篇』が引用する『楞伽經』X.256–258 と  
菩薩の階位との対応について

井野 雅文

1 はじめに

『修習次第』(*Bhāvanākrama*)は、カマラシーラ(Kamalaśīla)が中観派の「漸悟」の立場からヨーガ行者が実践する修習の過程を解説した3編の著作である。初、中、後篇のそれぞれは、内容的に重複する箇所も多いが<sup>1</sup>、連続的なものではなく、独立した著作である。

そのうちの『修習次第初篇』(*Bhāvanākrama I*)には、ヴィパシヤナー(*vipaśyanā*, 「観」*etc.*)実践の段階の根拠として『楞伽經』偈頌品の句 X.256–258 が引用される。

この X.256–258 に基づいた段階的修習の意義については、既にいくつかの先行研究において考察がなされている。例えば梶山 [1979: 421] は、カマラシーラの著作である『中観莊嚴論細疏』をも参照して、「(1) 有部や経量部の体系で認められる外界の实在が批判される予備的段階」、(2) 顕われた表象を伴う心のみが認められる段階(表象真実論)、(3) 知の表象も主客の二分も実在しないとされ、無二知が実在とされる瞑想の段階(表象虚偽論)、(4) 無二知あるいは知の純粹な輝きである照出性さえも本性をもたぬと宣告される段階」が区別されていると指摘する<sup>2</sup>。

本稿ではまず X.256–258 に対する解釈の内容を改めて確認し、次いで同じく『修習次第初篇』に説かれ、『解深密經』に基づくとされる<sup>3</sup>菩薩の階位(十二分位)の概略を示す。その上で、この瞑想の過程と修行の階梯の両者の間に対応が想定されているか否かを検証する。

『楞伽經』X.256–258 の解釈とその後段で説かれる菩薩の階位の対応という論点は、既に森山 [1985: 59, 70–74] において言及されている。しかし、同論文は X.256–258 の解釈の各文言と菩薩の階位の対応を検証するところではなく、6段階として想定される「カマラシーラの修道論」と四善根、初地、修道の記述との対応の検証に主眼を置くものである。本稿では『修習次第初篇』にみられる同偈頌に対する解釈と同論書後段の菩薩の階位の解釈とを抽出し、直接的な比較対照を試みたい<sup>4</sup>。

2 『修習次第初篇』における『楞伽經』に基づく修習の次第

『修習次第初篇』では『楞伽經』X.256–258 がまとめて提示され、続いて唯識を超えて人法無我到る過程と関連付けてその偈頌の解釈が示される。この「智慧の修習の次第が簡潔に示されたもの」(*saṃkṣepāt prajñābhāvanā-kramo nirdiṣṭaḥ*)として引用される『楞伽

<sup>1</sup> 一郷 [2011: 卷末付表]。

<sup>2</sup> 御牧 [1982: 244]、一郷 [2002: xvii, 35–36] もまた、このような4段階が想定されているという解釈を支持する。

<sup>3</sup> BhK.I, 228: *etac ca bhūmivyavasthāpanam āryasaṃdhirimocane nirdiṣṭam* |

<sup>4</sup> なお、森山 [1985: 59] は『楞伽經』X.256 が有相唯識派と無相唯識派の見解の超越を意味するという解釈 (*e.g.* 梶山 [1979: 417–422]) について疑義を呈している。

経』 X.256–258 の内容は次の通りである<sup>5</sup>。

唯心に昇り、外界の対象を構想分別するべきではない。(X.256ab)  
 真如という対象にとどまって、唯心を超えるべきである。(X.256cd)  
 唯心を超えて、無顕現を超えるべきである。(X.257ab)  
 無顕現にとどまるヨーガ行者、彼は大乘を見る。(X.257cd)  
 静寂な無享受の境位は諸誓願により清浄である。(X.258ab)  
 最も優れた智慧である無我を無顕現により見る。(X.258cd)

cittamātram samāruhya bāhyam arthaṁ na kalpayet | (X.256ab)  
 tathatālabane sthitvā cittamātram atikramet || (X.256cd)  
 cittamātram atikramya nirābhāsam atikramet | (X.257ab)  
 nirābhāsthito yogī mahāyānaṁ sa paśyati || (X.257cd)  
 anābhogagatiḥ sātā praṇidhānair viśodhitā | (X.258ab)  
 jñānaṁ nirātmakaṁ śreṣṭhaṁ nirābhāseṇa paśyati || (X.258cd)

この引用文に対して『修習次第初篇』が直接に与える解釈の概要は次の通りである。(以下の訳では、偈頌の語句を引用していると推定される箇所を太字で示す。)

(X.256ab)

まず、ヨーガ行者は、他の人々(反論者)によって外界の対象として構想分別されている物質的な諸法(有色法)について、それらは識と別であるか、あるいはまたこの識そのものが夢の状態にあるように現れるのかと考察するべきである。その中で、識の外に極微について考察するべきである。そして、極微を部分[の有る無し]の点から吟味するヨーガ行者はそれらを対象と見ない。このように[外の対象を]見ない彼には、この全ては唯心であり、さらに外界の対象は存在しない。それゆえにこのように[考える]。唯心に昇り、外界の対象を構想分別するべきではない。物質的な法(要素)の構想分別を捨てるべきであるとの意味である。それらは知覚される特徴を有するにも関わらず知覚されていないのだから、と考察するべきである。このように物質的な諸法(有色法)を顕わにしてから、物質的でない[諸法](無色法)[の本性]を顕わにするべきである(vibhāvayet)<sup>6</sup>。

(X.256cd)

そのうち、唯心であるということも、客体(grāhya)が存在しないならば、主体[の存在]は不合理である。なぜならば主体は客体に関係するのであるから。それ故に心は客体と主体の二つを離れていて心はまさに不二であると考察するべきである。不二で

<sup>5</sup> BhK.I, 210.

<sup>6</sup> BhK.I, 210–211: prathamam yogī ye rūpiṇo dharmā bāhyārthatayā paraiḥ parikalpitās teṣu tāvad vicārayet | kim ete vijñānād anye, āhovid vijñānam evaitat tathā pratibhāsate, yathā svapnāvasthāyām iti | tatra vijñānād bahiḥ paramāṇuśo vicārayet | paramāṇūmś ca bhāgaśaḥ pratyavekṣamāṇo yogī tān arthān na samanupaśyati | tasyāsamanupaśyata evam bhavati | cittamātram evaitat sarvaṁ na punar bāhyo 'rtho vidyate | tad evam cittamātram samāruhya bāhyam arthaṁ na kalpayet | rūpi-dharmavikalpāns tyajed ity arthaḥ | teṣāṁ upalabdhi-lakṣaṇa-prāptānām vicārayed anupalabdheḥ | evam rūpiṇo dharmān vibhāvāyārūpiṇo vibhāvayet |

『修習次第初篇』が引用する『楞伽經』X.256–258 と菩薩の階位との対応について

あるという特徴を有する真如という対象にとどまって、その唯心を超えるべきである。主体の様相を超えるべきである。[主体と客体の]二つの無顕現にほかならない不二智に立脚するべきであるとの意味である<sup>7</sup>。

(X.257ab)

このように唯心を超えて、[主体と客体の]二つの無顕現である(不二)智をも超えるべきである。諸事物は自己からも他者からも生起はあり得ないから、客体も主体も虚偽である点において、それら(諸事物)は異ならないのだから、それ(主体と客体の二つの無顕現である不二智)が真理であることも不合理であると考察するべきである<sup>8</sup>。

(X.257cd)

そして、そのように不二智の無顕現という智にヨーガ行者がとどまるとき、最高の真実にとどまるので、**彼は大乘を見る**。最高の真実を見ることこそが**大乘**といわれるのである。一切法を智慧の眼で省察しつつある者にとっての、正しい智慧で観ているときの**不見**、これこそが最高の真実を見るということである<sup>9</sup>。(以下略)

(X.258ab)

それゆえに智慧により省察している精神集中した者には、一切法は知覚されないだろう。それこそが最高の無知覚である。そして、そのようなヨーガ行者の境位を特徴とするその境位は**無享受**である。それより他に**見られるべきものが無い**からである。**静寂**であるというのは存在と非存在などの構想分別という特徴をもつ概念的拡張(戯論)が沈静化しているからである。(中略)

そして、このヨーガ行者のその境位はどうして清浄なのかと言え、**説く**。諸誓願により**清浄**である、と<sup>10</sup>。

<sup>7</sup> BhK.I, 211: tatra yac cittamātram tad apy asati grāhye grāhako na yukto grāhakasya grāhyāpekṣatvād | tataś cittam grāhya-grāhaka-viviktam advayam eva cittam iti vicārayed, advaya-lakṣaṇe tathatālabhane sthitvā tad api cittamātram atikramet | grāhakam ākāram atikramet | dvaya-nirābhāsa evādvaya-jñāne tiṣṭhed ity arthaḥ |

<sup>8</sup> BhK.I, 211: evaṁ cittamātram atikramya tad api dvaya-nirābhāsaṁ yaj jñānaṁ tad atikramet | svataḥ parato bhāvānāṁ janmānupapatteḥ grāhya-grāhakayoś cālikatve tad-avyatirekāt tasyāpi satyatvam ayuktam iti vicārayet |

<sup>9</sup> BhK.I, 211–212: tathā cādvaya-jñāna-nirābhāse jñāne yadā sthito yogī tadā paramatattve sthitatvāt, mahāyānaṁ sa paśyati | etad eva tan mahāyānam ucyate yat paramatattva-darśanam | etad eva tat paramatattva-darśanaṁ yat sarvadharmān prajñācakṣuṣā nirūpayataḥ samyagjñānāvaloke satyadarśanam |

この文中の jñānāvaloke に対応する蔵訳は ye shes kyi snang ba (BhK.I, 261) であり、漢訳は「智光明中」(T32.568a20) である。ここから、va が含まれない jñānāloke と綴られる異本の存在が推定される。また、『修習次第初篇』の後の部分には samyag-jñānāloka (BhK.I, 213.21), yang dag pa'i ye shes kyi snang ba, (BhK.I, 263.13), 「智光明」(T32.568b9) という表現がみられることから、jñānāloke が本来の形であった可能性が考えられる。

<sup>10</sup> BhK.I, 214: tasmāt syāt samāhitasya prajñayā nirūpayataḥ sarvadharmāṇām anupalambhaḥ | sa eva paramo 'nupalambhaḥ | sā ca tādrīṣi yoginām avasthāna-lakṣaṇā gatir anābhogā | tataḥ paramaḥ drṣṭavyasyābhāvāt | śānteti bhāvābhāvādi-vikalpa-lakṣaṇasya prapañcasyopasamāt |

BhK.I, 217: sā ceyam yoginām avasthā kuto viśodhitā.ity āha — pranidhānair viśodhitā.iti |

(X.258cd)

なぜならば、[主体と客体の] 不二を説く者たちには、不二を特徴とする智慧が勝義として最も優れたものとして認められている。それ（不二を特徴とする智慧）をもまた、無我、すなわち無自性であると、不二の無顕現という智により、ヨーガ行者は見るのである<sup>11</sup>。

以上のように解釈されているが、無顕現 (nirābhāsa) には二種類が想定されている。すなわち、客体と主体との無顕現 (X.257b)、および不二智の無顕現 (X.257c, 258d) である。

### 3 『修習次第初篇』への影響が想定される『摂大乘論』等における菩薩の階位

次に、『修習次第初篇』の中で『解深密経』に基づくと著者が述べている菩薩の階位に目を向けたい。『修習次第初篇』は同書の中篇と後篇と比較した場合、菩薩の修行の階位について詳述している点の一つの特徴がある。それは十二分位、すなわち信解行地、十地<sup>12</sup>、仏地の十二の段階 (dvādaśāvasthā) として説かれている。そして、このうちで信解行地は更に煖、頂、忍、世第一位の四善根に分けられる。実際にはこの四善根についての記述は『解深密経』に見られないものであり、『摂大乘論』などの影響が指摘されている [一郷 2002: 469–471]。『修習次第初篇』のこの部分の理解を明瞭にするため、以下ではまず、先行する『解深密経』、『摂大乘論』ならびに『大乘莊嚴経論』における四善根および初地の概念を考察したい。

まず、『解深密経』における信解行地の定義は、同じ章において説かれる十地についても同様であるが、『修習次第初篇』における定義に比べて簡略なものである。四善根についての個別の説明はなく、信解行地として述べられただけである。その内容は次の通りである。(漢訳は玄奘訳。)

<sup>11</sup> BhK.I, 218: yasmād yad advaya lakṣaṇaṃ jñānam advayādināṃ śreṣṭhaṃ paramārthenābhīmatam tad api nirātmakaṃ niḥsvabhāvam advaya-nirābhāseṇa jñānena paśyati yogī |

<sup>12</sup> 修行の段階としての十地は『大事』(mahāvastu) にも説かれている。その名称は次の通りである。

1. durārohā (難登), 2. baddhamānā (結慢), 3. puṣpamaṇḍitā (華飾), 4. rucirā (明輝), 5. cittavistarā (広心), 6. rūpavatī (具色), 7. durjayā (難勝), 8. janmanideśa (生縁), 9. yauvarājyātā (王子位), 10. abhiṣekatā (灌頂位)。

MV I.76: durāroheti prathamā bhūmī samupadiśyate | dvitīyā baddhamānā nāma tṛtīyā puṣpamaṇḍitā || caturthī rucirā nāma pañcamī cittavistarā | ṣaṣṭī rūpavatī nāma saptamī durjayā smṛtā || aṣṭamā janmanideśo navamī yauvarājyato | daśamī tv abhiṣekatā iti etā daśa bhūmayah ||

般若經典の十地思想は『大事』を前提とし、『摩訶般若波羅蜜経』発趣品第二十に現れる乾慧地等の十地説は声聞乘に七階、菩薩乘に二階を分けたもので、声聞・独覚・菩薩の三乘思想に基づいてそれらを段階的に眺めたものである。また『大事』が『十地経』に影響を与えたことは『大事』の第七地・難勝 (durjayā) が『十地経』第五地・難勝 (sudurjayā) として残っていることから窺える。従って、菩薩の十地の思想は般若経発趣品に説く菩薩の修行法を整理し、『大事』の十地説により菩薩行を加え、菩薩の修道上欠くべからざる教説を適宜に案配して成立したものと云える。(石川 [2011: 209–210])

『解深密経』や『瑜伽師地論菩薩地』に見られる瑜伽行派の十地説の先駆は『十地経』であると考えられる(デレアナ [2012: 160])。しかし、『修習次第初篇』では、方便と智慧の併修の必要性を概説する段で『十地経』が引用されるが(BhK.I, 195: na ca pariśeṣāsu na samudācarati)、他に『十地経』への言及はない(一郷 [2011: 141])。菩薩の階位の段では『入法界品』が引用されるが、それは仏地の不可思議を説く趣旨のものである(BhK.I, 228: guṇaikadeśa-paryanta nādhigacchet svayaṃ bhavaḥ— nirīkṣyaṃṇo buddho 'pi buddha-dharmā hy acintiyāh)。

『修習次第初篇』が引用する『楞伽經』X.256–258 と菩薩の階位との対応について

信解行地：

信解行地において菩薩は十種の教法の実践について信解をよく修習するので、認受（忍）によりその段階（地）を正しく超過したのちに菩薩の無過失の真実に入る。

mos pas spyod pa'i sa la byang chub sems dpa' chos spyad pa nram pa bcu po dag la mos pa shin tu bsgoms pa'i phyir bzod pas sa de las yang dag par 'das nas byang chub sems dpa'i yang dag pa nyid skyon med pa la 'jug go // (P Ngu 43a5–6)

謂諸菩薩先於勝解行地，依十法行極善修習勝解忍故，超過彼地證入菩薩正性離生。(T16.703.b26–28)

初地：

初地は大きな意義を有するものであり、かつて得られなかった出世間の心を獲得するので、歓喜であり、しかも最高の歓喜が広大であるために「極喜」と称される。

sa dang po ni don che ba / 'dris pa ma yin pa / 'jig rten las 'das pa'i sems thob pas dga' ba dang mchog tu dga' ba rgya che ba'i phyir rab tu dga' ba zhes bya'o // (P Ngu 44a6–7)

成就大義得未曾得出世間心生大歡喜，是故最初名極喜地。(T16.704a14–15)

一方また、『撰大乘論』入所知相分第四では四善根がそれぞれ次のように定義されている (P 5549 Li 28b–29b, D 4048 Ri 28b–25b; 長尾 [1987: 下 68–74, 付録 65–66])。この後に確認するように「明得」など、それぞれの位の同義語は『修習次第初篇』におけるそれに対応している。また忍位において唯識 (rnam par rig pa tsam nyid; don med pa, 対象がないこと、無義、無塵) に入るという記述が『修習次第初篇』と一致する。(漢訳は玄奘訳。)

煖位：

それら四種の考察（尋思）により、対象がないとの小なる認受（下品無義忍）の時、光明を得る精神集中（明得三摩地）があり、すなわち順決擇分の煖の抛り所である。

yongs su tshol ba bzhi po de dag gis don med par bzod pa chung ngu'i tshes snang ba thob pa'i ting nge 'dzin te / nges par 'byed pa'i cha dang / mthun pa dro bar gyur pa'i gnas yin no // (長尾 [1987: 下 付録 65.28–66.2])

由四尋思於下品無義忍中有明得三摩地，是煖順決擇分依止。(T31.143b4–6)

頂位：

大なる認受（上品忍）の時、光明が増大する精神集中があり、すなわち頂の抛り所である。

bzod pa chen po'i tshes snang ba mched pa'i ting nge 'dzin te / rtse mo'i gnas so // (66.2–3)

於上品無義忍中有明增三摩地，是頂順決擇分依止。(T31.143b6–7)

忍位：

四種のあるがままに完全に知ること（四種如実遍智）において唯識に入るとき、対象がないと確定することが真実の意味の一部に入ることに従う精神集中（入眞義一分三摩地）があり、すなわち真理に合致した認可（諦順忍）の抛り所である。

yang dag pa ji lta ba bzhin du yongs su shes pa bzhi po dag la nram par rig pa tsam nyid

du zhugs pa dang / don med pa la nges pa ni / de kho na'i don gyi phyogs gcig la zhugs  
pa'i rjes su song ba'i ting nge 'dzin te / bden pa'i rjes su mthun pa'i bzod pa'i gnas so //  
(66.3-8)

復由四種如實遍智已入唯識。於無義中已得決定。有入真義一分三摩地。是諦順忍依  
止。(T31.143b7-9)

世第一位：

その後に唯識の想念を顕わにすること [が生じるような精神集中]、それが間をおか  
ない精神集中(無間三摩地)であり、すなわち世第一法の抛り所である、とみられる。  
gang gi 'og tu rnam par rig pa tsam gyi 'du shes rnam par 'jig pa de ni / de ma thag pa'i  
ting nge 'dzin te / 'jig rten pa'i chos kyi mchog gi gnas su blta'o // (66.8-10)

從此無間伏唯識想。有無間三摩地。是世第一法依止。(T31.143b9-10)

『撰大乘論』は以上のように大乘における四善根のあり様を説明する。同論では、この  
四善根の解説の前に唯識に悟入する境位としての初地と、唯識に悟入することの目的(無  
分別智と後得智の獲得)が説明される。名実ともに唯識に悟入する初地について、同論は  
以下のように語る。

初地：

そのように、この菩薩は認識対象の形相に関して唯識に入るので「入」であり、そこ  
に入ったことで極喜地に入ったのであり、法界をよく理解したということである。如  
来の種族に生じることである。全ての有情についての平等心と、全ての菩薩に対する  
平等心と、全ての仏に対する平等心を獲得することであり、それが彼(菩薩)にとつ  
ての見道である。

de ltar na byang chub sems dpa' 'di shes bya'i mtshan nyid la rnam par rig pa tsam nyid  
du 'jug pas zhugs pa yin te / der zhugs pas sa rab tu dga' ba la zhugs pa yin te / chos kyi  
dbyings legs par rtogs pa yin / de bzhin gshegs pa'i rigs su skyes pa yin / sems can thams  
cad la sems mnyam pa dang / byang chub sems dpa' thams cad la sems mnyam pa dang /  
sangs rgyas thams cad la sems mnyam pa thob pa yin te / de ni de'i mthong ba'i lam yin  
no / (64.26-65.4)

如是菩薩悟入唯識性故。悟入所知相。悟入此故入極喜地。善達法界生如來家。得  
一切有情平等心性。得一切菩薩平等心性。得一切佛平等心性。此即名為菩薩見道。  
(T31.143a20-23)

『撰大乘論』にみられる以上のような四善根の解説に対応する定義が『大乘莊嚴經論』第  
14章(漢訳は教授品第十五)にも見られる。『撰大乘論』や『修習次第初篇』では忍位に  
おいて外界の対象が否定され、それが唯識に対応していた。これに対して、『大乘莊嚴經  
論』では忍位において対象(所執)が否定される点は共通するが、頂位が唯心(cittamātra)  
と対応させられている。また、忍位の異名である一分入(ekadeśapraṁviṣṭa, phyogs gcig la  
zhugs pa)に対応する語が見られない。

煖位：

それから、そのよう(五種の利徳を得ること)になったこの菩薩は精神集中し、意言

『修習次第初篇』が引用する『楞伽經』X.256–258 と菩薩の階位との対応について

を離れた全ての対象を見ない。(第 23 偈)

そのようになった精神集中した心をもつ菩薩は、意言を離れた一切法を見ない。自相と共相と呼ばれるものを意言に過ぎないと見る。それは彼にとっての煖位である。これが法の光明であり、それに関しては『灰河經』に、光明とは、これは法を精察して認受すること(見法忍)の別名である、と説かれている。

**tataś cāsau tathābhūto bodhisattvaḥ samāhitaḥ |**

**manojalpād vinirmuktān sarvārthān na prapaśyati ||23|| (MSA, 93.6–7)**

**tathābhūto bodhisattvaḥ samāhita-citto manojalpād vinirmuktān sarvadharmān na paśyati** svalakṣaṇa-sāmānya-lakṣaṇākhyān manojalpa-mātram eva khyāti | sāsyoṣmagatāvasthā | ayaṁ sa āloko yam adhikṛtyoktaṁ kṣāranadyām | āloka iti dharma-nidhyāna-kṣānter etad adhivacanam iti | (MSA, 93.14–17)

偈曰。爾時此菩薩 次第得定心 唯見意言故 不見一切義

釋曰。此菩薩初得定心離於意言。不見自相總相一切諸義。唯見意言。此見即是菩薩煖位。此位名明。如佛灰河經中所說明。此明名見法忍。(T31.625a13–19)

頂位：

法の光明の増大のために堅く精勵を起こし、そして法の光明の増大により唯心にとどまる。(第 24 偈)

彼はその法の光明の増大のために、持続した行為により、堅く精勵を起こす。それが彼にとっての頂位である。そして、法の光明の増大により唯心にとどまる。これ(全て)は心であると理解するからである。

**dharmālokasya<sup>13</sup> vṛddhyartha vīryam ārabhate dṛḍham |**

**dharmāloka-vivṛddhyā ca cittamātre 'vatiṣṭhate ||24|| (MSA, 93.8–9)**

sa tasyaiva **dharmālokasya vivṛddhy-artham āsthita-kriyayā dṛḍham vīryam ārabhate** | sāsya mūrdhāvasthā | **dharmāloka-vivṛddhyā ca cittamātre 'vatiṣṭhate** | cittam etad iti prativedhāt | (MSA, 93.17–19)

偈曰。爲長法明故 堅固精進起 法明增長已 通達唯心住

釋曰。此中菩薩爲增長法明故起堅固精進。住是法明通達唯心。此通達即是菩薩頂位。(T31.625a19–23)

忍位：

それ故に、全ての対象の顕現を心のなかに見る。客体についての迷乱が除かれるその時、彼にはこれ(忍位)がある。(第 25 偈)

その後、心のなかのみに全ての対象の顕現であると見る。心の他に対象はない。そして、その時にこの人には客体についての迷乱が除かれている。主体についての迷乱だけが残る(第 26 偈前半)。それが彼にとっての忍位である。

**sarvārtha-pratibhāsatvaṁ tataś citte prapaśyati |**

<sup>13</sup> dharmālokasya 長尾 [2007: 265]] dharmālokasya MSA

**prahīṇo<sup>14</sup> grāhya-vikṣepas<sup>15</sup> tadā tasya bhavaty asau ||25||** (MSA, 93.10–11)

**tataś citta eva sarvārtha-pratibhāsatvaṃ paśyati** | na cittād anyam arthaṃ | **tadā cāsyā grāhya-vikṣepaḥ prahīṇo bhavati** | grāhaka-vikṣepaḥ kevalo 'vaśiṣyate | sāsyā kṣāntya avasthā | (MSA, 93.20–22)

偈曰。諸義悉是光 由見唯心故 得斷所執亂 是則住於忍

釋曰。此中菩薩若見諸義悉是心光。非心光外別有異見。爾時得所執亂滅。此見即是菩薩忍位。(T31.625a24–29)

世第一位：

それゆえに、彼には主体についての迷乱だけが残る。そして、その時に更にただちに間をおかない精神集中（無間三摩提）に触れる。（第 26 偈）

そして、その時に速やかに間をおかない精神集中に触れる。それが彼の世第一法位である。なぜそれは「間をおかない」と言われるのか。

なぜならば、その直後に主体についての迷乱が除かれるからである。（第 27 偈前半）

**tato grāhaka-vikṣepaḥ kevalo 'syāvaśiṣyate** |

**ānantarya-samādhim ca sprṣaty āśu tadā punaḥ ||26||** (MSA, 93.12–14)

**tadā ca kṣipram ānantarya-samādhim sprṣati** | sāsyā laukikāgradharmāvasthā | kena kāraṇena sa ānantarya ucyate | (MSA, 93.22–23)

**yato grāhaka-vikṣepo hīyate tad-anantaram ||27ab||** (MSA, 93.24)

偈曰。所執亂雖斷 尚餘能執故 斷此復速證 無間三摩提

釋曰。此中菩薩爲斷能執亂故。復速證無間三摩提。問。有何義故此三摩提名無間。

答。由能執亂滅時爾時入無間。故受此名。此入無間即是菩薩世間第一法位。(T31.625a29–b6)

初地：

その後、彼は二つの把握（二執）を離れ、出世間の無上にして、構想分別がない、汚れを離れた智慧を得る。（第 28 偈）

この後は見道位である。客体という把握と主体という把握を離れているから二つの把握（二執）を離れている。無上の乗であることにより無上であり、客体と主体という構想分別を離れているから構想分別がない。見 [道の] 智において捨てられるべき煩惱を捨てているから汚れを離れている。これにより塵埃がなく汚れを離れていると説かれている。

それは彼にとって抛り所の転換（転依）であり、第一の階位（初地）であると認められる。そして、無量の劫を経て、彼にとってそれ（転依）はきわめて清浄なものとなる。（第 29 偈）

**dvayagrāha-visamyuktaṃ lokottaram anuttaram** |

<sup>14</sup> prahīṇo 長尾 [2007: 265] prahīṇo MSA

<sup>15</sup> vikṣepas 長尾 [2007: 265] nikṣepas MSA

『修習次第初篇』が引用する『楞伽經』X.256–258 と菩薩の階位との対応について

**nirvikalpaṃ malāpetam jñānam sa labhate punaḥ<sup>16</sup> ||28||** (MSA, 93.27–28)

tataḥ pareṇa darśanamārgāvasthā | **dvayagrāha-visaṃyuktam** grāhyagrāha-grāhaka-grāha-visaṃyogāt | **anuttaram** yānānantaryeṇa<sup>17</sup> | **nirvikalpaṃ** grāhya-grāhaka-vikalpa-visaṃyogāt | **malāpetam** darśanañjeya[read heya]kleśaprahāṇāt | etena virajo vigatamalam ity uktam bhavati | (MSA, 94.1–4)

**sāsyāśraya-parāvṛtṭiḥ prathamā bhūmir iṣyate |**

**ameyaiś cāsyā sā kalpaiḥ suvīśuddhiṃ nigacchati ||29||** (MSA, 94.5–6)

偈曰。遠離彼二執 出世間無上 無分別離垢 此智此時得

釋曰。遠離彼二執者。所執能執不和合故。出世間無上者。得無上乘故。無分別者。即彼二執分別無故。離垢者。見道所斷煩惱滅故。菩薩爾時名遠塵離垢得法眼淨。

偈曰。此即是轉依 以得初地故 後經無量劫 依淨方圓滿。(T31.625b7–b15)

以上が『修習次第初篇』に説かれる信解行地から初地までの内容に影響があったとみられる主な教説である。

#### 4 『修習次第初篇』における菩薩の階位

では、上記の先行する教理を踏まえたものと考えられる『修習次第初篇』における四善根と初地の定義を確認しよう。ここでは『解深密經』に記述が見られない四善根の各項目についても定義されている。『解深密經』地波羅蜜多品における十地（仏地を加えて十一支分）の定義は、まずそれぞれの地(sa)で実現されるべき内容を一通り提示してから、次の段でそれぞれの地の名称とその由来を示すという二段構成になっていて、そのうちでも前段の方が詳しい説明になっている。なお、『解深密經』では「現象の限界」が見道に、「行為の完成」が修道に相当するとされているが、止観と修行階梯との対応は明記されていない(デレアヌ [2012: 165])。そして、『修習次第初篇』はこの前段を主に参照しているが、それよりも更に詳しい説明になっている。それは『修習次第初篇』では最終章にあたる、菩薩の十二の境位(信解行地、十地、仏地)を解説する箇所の冒頭部分である。そのうちで、『楞伽經』X.256–258 との対応が想定される四善根と初地の内容は次の通りである。

信解行地：

その [十二分位] のなかで、人法 [二] 無我 (人と法に本質が無いこと) という真実が明白にならないうちは、ただきわめて堅固な信解がある。障害 (魔) などによっても破壊されず、信解の力により真実を現わすとき、そのときにきわめて堅固な信解の故に信解行地が確立される。

tatra yāvat pudgaladharmanairātmyatattvaṃ na sākṣātkaroti, kevalam dṛḍhatarādhimuktiḥ | mārāḍibhir apy abhedyo yadādhimuktibalena tattvaṃ bhāvayati, tadā dṛḍhādhimuktito 'dhimukticaryābhūmir vyavasthāpyate | (BhK.I, 223)

煖位：

すなわち、外界の対象 [の本性] を顕わにすることにより、僅かに明瞭な智慧の光が

<sup>16</sup> punaḥ MSA] tataḥ 長尾 [2007:270]

<sup>17</sup> yānānantaryeṇa 長尾 [2007: 270]] yānānuttaryeṇa MSA

ある時、その時に煖（暖かさ）と名付けられる順決択分がある。そして、それはこの大乘では明得三昧（光明を得る精神集中）と言われる。

tathā hi yadā bāhyārthaṁ vibhāvayatā īṣat<sup>18</sup> spaṣṭo jñānāloko bhavati, tadā uṣmagatanāmakaṁ nirvedhabhāgīyaṁ bhavati | sa cātra mahāyāna ālokalabdhasamādhir ucyate | (p. 223)

頂位：

一方、まさにその智慧の光が中程度に明瞭である時、その時に頂（頂上）と名付けられる順決択分がある。そして、明増三昧（増大した光明の精神集中）と言われる。

yadā tu sa eva jñānāloko madhyamaspaṣṭo bhavati, tadā mūrdhanāmaka-nirvedhabhāgīyaṁ bhavati, vṛddhālokaś ca samādhir ucyate | (p. 224)

忍位：

一方、より明瞭な、外界の対象が現れない智慧の光が生じる時、その時に唯識の状態であるから忍（認受）と名付けられる順決択分がある。そして、一分入三昧（[真実義の] 一部分に入っている精神集中）と言われる。客体の様相の無知覚に入るからである。

yadā tu spaṣṭataro bāhyārthānābhāsajñānāloko jāyate, tadā vijñaptimātrāvasthānāt kṣāntināmakaṁ nirvedhabhāgīyaṁ bhavati | ekadeśapraviṣṭaś ca samādhir ucyate | grāhyākārānupalambhapraveśāt | (p. 224)

世第一位：

一方、客体と主体の様相を離れた不二智（[主体と客体の] 二つがない智慧）を顕わす時、その時に世第一法（[世間における] 最高位の法）と呼称される順決択分がある。そして、それは無間三昧（間を置かない精神集中）と言われる。まさにその直後に真実に入るからである。

yadā tu grāhya-grāhakākārahitam advayaṁ jñānaṁ vibhāvayet, tadā 'gradharmākhyāṁ nirvedhabhāgīyaṁ bhavati | ānantaryaś ca sa samādhir ucyate, tadanantaram eva tattvapraveśāt | (p. 224)

初地：

その中で初地とは、初めて人法 [二] 無我の真実を証するという部分が満たされたものとして確立される。すなわち、[世] 第一法から間を置かずに初めて出世間の、全ての概念的拡張（戲論）を離れた一切法無自性をまのあたりにする、より明確な智慧が生じる。そのとき、菩薩は正しい確定に踏み込んでいることから見道が生じるので、初地に入っている。

tatra prathamā bhūmiḥ prathamāṁ pudgala-dharma-nairātmya-tattvādhiḡgamāṅga-

<sup>18</sup> Tucci (BhK.I, 223) は yadā sarvadharmanairātmyaṁ bhāvayata iyat とするが、NAMDOL (BhKN, 226) を参照して修正した。これはチベット語訳 (phyi rol gyi don rnam par 'jig pa na) に一致する。一切法無自性が問題になるのは初地の段階であり、煖位では外部の対象の吟味に重点が置かれると考えれば、チベット語訳に従うのが妥当であろう。

『修習次第初篇』が引用する『楞伽經』X.256–258 と菩薩の階位との対応について

paripūrītā<sup>19</sup> vyavasthāpyate | tathā hi yadā 'gradharmānantaram prathamatarām  
lokottaram sarva-prapañca-rahitam sarvadharmā-niḥsvabhāvātā-sākṣātkāri sphuṭatarām  
jñānam utpadyate | tadā bodhisattvaḥ samyaktvanyāmāvākṛāntito darśanamārgotpādāt  
prathamām bhūmim praviṣṭo bhavati | (p. 224)

以上が『修習次第初篇』における四善根と初地の定義である。ところで、上に引用した世第一位について述べる段には次のような一文がある。

yadā tu grāhya-grāhakākāra-rahitam advayaṁ jñānam vibhāvayet, tadā 'grad-  
harmākhyam nirvedhabhāgiyam bhavati | (p. 224)

梵文の vibhāvayet に対応する蔵訳は nmam par 'jig pa となっている。この部分に関し、森山 [1985: 56] は advayaṁ jñānam vibhāvayet を「無二知が顕れる」と解釈するが、一郷 [2011: 49] [2002: 470] 和訳は訳チベット語訳および『撰大乘論』（長尾 [1987]）を参照して「不二智を伏滅した」と訳している<sup>20</sup>。本稿では、X.256ab の解釈における vibhāvayet の用法、煖位を説明する段における vibhāvayatā の用法、および、X.256cd の解釈において不二智に立脚する段階が強調されていることを考慮して、「顕わす」と訳した。

## 5 『修習次第初篇』における『楞伽經』に基づく修習の次第と『解深密經』等に基づく階位との対応

では以上の考察を総合して、『修習次第初篇』においてそれぞれ別の部分に述べられている『楞伽經』に基づくとされる修習の次第と、『解深密經』等に基づくとされる菩薩の階位との間に対応関係が想定されているかを検証しよう。

(X.256ab)

「この全ては唯心であり、さらに外界の対象は存在しない」(cittamātram evaitat sarvaṁ na punar bāhyo 'rtho vidyate) と解釈されているのであるから、これは外界の対象が現れない智慧の光が生じ (bāhyārthānābhāsajñānaloko jāyate) , 「唯識の境位」(vijñaptimātrāvasthāna) であり、「客体の様相の無知覚に入る」(grāhyākārānupalambhapraveśa) 忍位との対応が想定される。なお、物質的な(有色)法と非物質的な(無色)法について考察するという解釈がなされている点に着眼すると、「外界の対象を顕わにすること」(bāhyārtha vibhāvayatā) との表現を含む煖位との関連も想定され得る。この対応が成立するならば、明文上には現れないが、煖位と忍位との中間にある頂位も含意されていると推測することができる。

(X.256cd)

「客体 (grāhya) が存在しないならば、主体 [の存在] は不合理である」として、不二であるという特徴を有する真如という拠り所にとどまって不二智に立脚し (dvaya-nirābhāsa evādvaya-jñāne tiṣṭhed), さらに [その] 唯心を越えるべきであると解釈されるのであるから、「客体と主体の様相を離れた不二智を顕わにす」(grāhyagrāhakākārarahitam

<sup>19</sup> °paripūrītā BhKN] °paripūrīto BhK.I

<sup>20</sup> この vibhāvayet を SHARMA [1997: 45] 英訳は shines forth と訳すが、VAN DEN BROECK [1977: 45] 仏訳は écarter (除外する, 分離する) と訳している。



『修習次第初篇』が引用する『楞伽經』X.256-258 と菩薩の階位との対応について

(X.257ab)

唯心を越えて、無顕現を越えるべきである。

→ 初地への到達 (越えるべき無顕現とは主体客体の両者の無顕現)

[『撰大乘論』では「唯識」に相当。ただし唯識の超越は説かれない]

(X.257cd)

無顕現にどまるそのヨーガ行者は大乘を見る。

→ 初地以上 (とどまるべき無顕現とは不二智の無顕現)<sup>22</sup>

(X.258ab)

無享受の状態である静寂は諸誓願により清浄である。

→ 初地以上

(X.258cd)

最も優れた智慧である無我を無顕現として見る。

→ 初地以上 (無顕現とは不二智無顕現)

以上の考察により、『修習次第初篇』に説かれる『楞伽經』X.256-258 に基づくとされる修習の次第と『解深密經』に基づくとされる菩薩の階位(十二分位)との対応が確認された。

更に、『修習次第初篇』における四善根と初地の捉え方について、『撰大乘論』などの先行する論書の説と比較に基づいて次のことが言える。

『修習次第初篇』の四善根の説では煖位に *ālokalabdha-samādhi*、頂位に *vṛddhāloka-samādhi*、忍位に *ekadeśapraṣṭa-samādhi*、世第一法に *ānantarya-samādhi* という別名が与えられ、忍位が外界の対象が現れないという意味での唯識の境位 (*vijñaptimātrāvasthāna*) であるとされる。これら四善根の説明は『解深密經』には見られず、信解行地として一括されている。

これを『大乘莊嚴經論』と比較すると、煖位、頂位、世第一法の状態の形容に関しては類似性が認められる。すなわち、*āloka* (明)、*dharmāloka-vivṛddhi* (法明増長)、*ānantarya-samādhi* (無間三摩提) である。相違点としては、忍位の説明において、唯識、あるいは真実に部分的に入るという表現はなく、「客体についての迷乱が除かれている。主体についての迷乱だけが残る。」とされるのみであり、「唯心にとどまる」(*cittamātre `vatiṣṭhate*) という状態が配当されているのは頂位である。初地では客体のみならず、主体についての迷乱が除かれた転依 (*asyāśraya-parāvṛtti*) が起きるとされる。

さらに『撰大乘論』と比較すると、煖位に明得三摩地 (*snang ba thob pa'i ting nge 'dzin*)、頂位に明増三摩地 (*snang ba mched pa'i ting nge 'dzin*)、忍位に入眞義一分三摩地 (*de kho na'i don gyi phyogs gcig la zhugs pa'i rjes su song ba'i ting nge 'dzin*)、世第一法に無間三摩地 (*de ma thag pa'i ting nge 'dzin*) という別名が与えられていて、外界の対象が現れない

<sup>22</sup> 『楞伽經』第3章に説かれる聖智三相 (LAS, 49.14-17) のうち無所有相 (*nirābhāsakṣaṇa*) は第八地、一切諸仏自願処相 (*sarvabuddha-svapraṇidhāna-adhiṣṭhānalakṣaṇa*) は第九地、自覚聖智究竟之相 (*pratyātma-āryajñānagati-lakṣaṇa*) は第十地にそれぞれ対応すると考えられることを考慮すれば (高崎 [1980: 131])、經文の本来の意義として X.257c と第八地、X.258b と第九地、X.258c と第十地の対応が想定し得る。しかし、『修習次第初篇』は聖智三相には言及せず、不二智無顕現を初地に配するなど、『楞伽經』とは異なる独自の体系になっている。

という意味での唯識 (nam par rig pa tsam nyid) に入る境位は忍位であるとされる。これらの共通性から、『修習次第初篇』の四善根の説との密接な関係を見てとることができる。しかし、初地において証するものは、あくまでも唯識であって (de ltar na byang chub sems dpa' 'di shes bya'i mtshan nyid la nam par rig pa tsam nyid du 'jug pas zhugs pa yin te), 諸法無自性ではない。

カマラシーラの師であるシャーントラクシタの『中観莊嚴論』では、唯識を超えた境地を無我 (bdag med) としており、既に『撰大乘論』の体系との差異がみられるのであるが (sems tsam la ni brten nas su / phyi rol dngos med shes par bya / tshul 'dir brten nas de la yang / shin tu bdag med shes par bya /92/) (MK, 294), その境位に至るまでの段階を詳細に述べてはいない。『修習次第初篇』は『撰大乘論』、もしくはそれと同じ系統の四善根の説を採用することで修習の過程を記述するとともに、『中観莊嚴論』にみられる思想を継承して、初地においては「一切法無自性をまのあたりにする、より明確な智慧が生じる」(sarvadharmā-niḥsvabhāvatā-sākṣātkāri sphuṭataram jñānam utpadyate) とした。

『修習次第』の中篇および後編には『楞伽經』X.256–258 の引用がないばかりではなく、四善根と十地の内容も具体的に説かれず、初地と仏地に言及するのみであるが、中篇では参考文献として『解深密經』のほか『十地經』と『楞伽經』の名が挙げられる。これに対し、初篇においては修行の階位の説明は『解深密經』に基づくとしながらも、実際には『解深密經』の記述だけではなく、『撰大乘論』などの論書にみられる、より精密な階位の定義を基礎にしている。さらに、『中観莊嚴論』の思想を受けて、唯識を超えることで到達される初地において実現される境位を人法二無我、あるいは一切法無自性であるとした。したがって、実態としては初篇において『楞伽經』の瞑想の過程と『解深密經』等の菩薩の修行過程の教理が単純に融和されているのではなく、カマラシーラ独自の実践論を体系化する柱として『楞伽經』と『解深密經』等が用いられたとみるべきであろう。

〈略号および使用テキスト〉

- BhK.I *First Bhāvanākrama of Kamalaśīla*, ed. G. Tucci, Minor Buddhist Texts, Part II, Serie Orientale Roma vol. IX, Roma: Is. M. E. O, 1958.
- BhK.III *Third Bhāvanākrama of Kamalaśīla*, ed. G. Tucci, Minor Buddhist Texts, Part III, Serie Orientale Roma vol. XLIII, Roma: Is. M. E. O, 1971.
- BhKN *Bhāvanākramaḥ of Ācārya Kamalaśīla*, ed. G. Namdol, Sarnath: Central Institute of Higher Tibetan Studies, 1997.
- LAS 『梵文入楞伽經』, 南條文雄, 大谷大學, 1923.
- MK *Madhyamakālaṃkāra*, ed. Masamichi Ichigō, Tokyo: Buneido, 1985.
- MSA *Mahāyāna-Sūtrālaṃkāra, Exposé de la doctrine du grand véhicule*, Tome I, II, ed. S. Lévi, Paris: Libraire honoré champion, 1907. (repr. Tokyo: Rinsen Book Co., 1983.)
- MV *Le Mahāvastu*, Collection d'ouvrages orientaux, 2. Série, Société asiatique, ed. É. Senart, Paris: Imprimerie nationale, 1882–97. (repr. Tokyo: Meicho Fukyu Kai, 1977.)

(参考文献)

- 石川 美恵 [2011] 「菩薩の十地について — 『法門備忘録』と『二卷本訳語釈』の語釈を中心に —」, 『東洋大学大学院紀要』48, 209-226.
- 一郷 正道 [2002] 「信解行地に関するカマラシーラの見解」, 『初期仏教からアビダルマへ』, 平楽寺書店, 467-482.
- [2011] 『瑜伽行中観派の修道論の解明 — 「修習次第の研究」 —』 「2008 年度～2010 年度科学研究費補助金基盤研究 (C) 成果報告書」.
- 梶山 雄一 [1979] 「シャーントラクシタの批判哲学」, 『仏教の比較思想論的研究』, 東京大学出版会.
- 高崎 直道 [1980] 『楞伽經』, 仏典講座 17, 大蔵出版.
- デアヌ, フロリン  
[2012] 「瑜伽行の実践」, 『唯識と瑜伽行』 (シリーズ大乘仏教 7), 春秋社, 152-180.
- 長尾 雅人 [1987] 『撰大乘論』 (上・下), 講談社.  
[2007] 『『大乘莊嚴經論』和訳と註解 — 長尾雅人研究ノート —』 (2), 長尾文庫.
- 長沢 実導 [1978] 『瑜伽行思想と密教の研究』, 大東出版社.
- 御牧 克己 [1982] 「頓悟と漸悟—カマラシーラの『修習次第』」, 『中観思想』 (講座・大乘仏教 7), 春秋社, 217-249.
- 森山 清徹 [1985] 「Kamalaśīla の唯識思想と修道論 — 瑜伽行中観派の唯識説の観察と超越 —」, 『仏教大学人文学論集』 19, 43-77.
- SHARMA, P. [1997] *Bhāvanākrama of Kamalaśīla*, New Delhi: Aditya Prakashan.
- VAN DEN BROECK, J.  
[1977] *La Progression dans la Méditation (Bhāvanākrama de Kamalaśīla)*, Publications de l'Institut Belge des Hautes Études Bouddhiques, Série 'Études et Textes' 6, Bruxelles: Institut belge des hautes études bouddhiques.

〈Keywords〉 修習次第, カマラシーラ, 楞伽經, 解深密經, 四善根

いの まさふみ 東京大学大学院博士課程

On the *Laṅkāvatāra* X.256–258 Cited in the *Bhāvanākrama* I  
in View of the Stages of Bodhisattva

INO, Masafumi

In relation to the *vipaśyanā* or “clear-sight” practice, Kamalaśīla cites three stanzas from the *Laṅkāvatāra-sūtra* X.256–258.

This article, first, analyses the meaning of the above three stanzas on the basis of Kamalaśīla’s own commentary to them. Secondly, we see the outline of Bodhisattva stages, from *uṣmagata* or “having become warm,” the first of four *nirvedha-bhāgīya* or “belonging to the penetration,” to the first stage (*bhūmi*) of Bodhisattva’s ten *bhūmis* which are also explained in the *Bhāvanākrama* I. Thirdly, the article examines those relevant explanations found in the *Mahāyānasamgraha* and *Mahāyānasūtrālaṅkāra* in order to clarify the preceding usage and meanings of those stages, both of which appear to have derived from the *Samdhinirmocana-sūtra* to which Kamalaśīla refers as a basis of his discussion.

Taking the above comparative analysis into consideration, the article gives concluding remarks on the relationship between Kamalaśīla’s interpretation of the cited *Laṅkāvatāra-sūtra* X.256–257 and his understanding of the Bodhisattva stages as follows: (1) *Uṣmagata*, *mūḍha*, and *kṣānti*, (2) *laukikāgradharma*, and (3) the first stage of ten *bhūmis* correspond respectively to X.256ab, 256cd, and 257–258. It is also clarified, along with Kamalaśīla’s originality, how and to what extent those preceding understandings of Bodhisattva stages in the *Mahāyānasamgraha*, etc. influenced the *Bhāvanākrama* I. Kamalaśīla’s understanding of Bodhisattva stages is not a simple amalgamation of the meditational process found in the *Laṅkāvatāra-sūtra* and the Bodhisattva practice dealt with in the *Samdhinirmocana-sūtra*, but he seems to have used those *sūtras* as pillars for systematising his own theory of Bodhisattva practice following the Yogācāra tradition of meditational process and the syncretic theory of the Yogācāra-Mādhyamika founded by his teacher, Śāntarakṣita.